クロージング（10 月 29 日）

挨拶：

脇村　孝平

こんにちは。もう時間も押し迫ってまいりましたので、簡単に済ませたいと思います。

私の肩書きはDeputy Deanと英訳ではなっておりますが、要するに雑用係です。私は大学での教育においては、アジア経済史（Asian economic history）という講義を担当して、研究においては、インド社会経済史（Social economic history of India）という分野を専攻しています。要するに歴史研究者とお考えいただければ幸いです。

私に振りあてられた役柄はConcluding remarksですが、すでに総括的なことは最終セッションで述べられたわけですから、簡単に感想めいたことを二つほど申し上げることにとどめたいと思います。三日間聞き通した一聴衆としてのそれにすぎませんけれども。

第一は、次のようなことです。正直に言いまして、私は東アジア共同体に関しては、かなり悲観的な展望しか持っていなかった者です。理由は、東アジアはさまざまな点でヨーロッパのように成熟した環境にはないということにあります。しかし、今回のシンポジウムの全体を聞き終えて、考え直して見ようと思ったことも事実です。

しかし、もちろんそれは、だからといって楽観的な展望を持ちうるようになったということではありません。むしろ、東アジア共同体の実現に向けては、依然として極めて困難な道程しかないという印象を強めました。それは特に二日目の第４セッションと第５セッションで論じられた、安全保障に関する諸問題を考えるにつけ、一層その感を強くしたわけです。それにもかかわらず、共同体の必要性と意義については、一定程度説得されたことも事実です。

金融や通貨が論じられた１日目の第１セッションと第２セッション、あるいは最終セッションでは、ドルの一元的支配から脱することの必要性が強く訴えられたことは、印象に残ったところです。したがって、東アジア共同体を実現することの意義として、通貨統合が強力に主張されるのは当然なのかなと思った次第です。

ただし、二日目の第３セッションで論じられた地域的な市場統合に関しては、その意義はそれほど一義的なものではないようです。複数の発表者によって、ＲＴＡは少なくとも開かれたものになる必要性が示唆されたように私は思います。

いずれにしても、地域統合のメリット、デメリットについて、あるいは東アジア共同体のメリット、デメリットについて、学問的に、あるいはいろいろな角度から、真剣な講究に臨まれることが必要だと思います。

私は歴史研究者ですから、簡単に歴史問題についても少し触れておきたいと思います。本日の第７セッションでこの問題が論じられたわけです。東アジアにおいてこの歴史問題は、非常に困難な問題になっております。この歴史問題は、基本的にこの 100 年間ほどの近代史にかかわるものです。言うまでもなく、この歴史問題はもともと東アジアの近代史において、日本が果たしてきた役割というものに深くかかわっています。しかし、今ここでこの複雑な問題に立ち入ることは、私はいたしません。

むしろ、ここで少しだけ言及したいのは、近代史の前にありました 16～18 世紀にかけての、いわゆる近世（early modern）の時代のアジアにおける国際関係です。近年に進捗したアジア経済史研究が明らかにしてきたのは、この時代のアジアでは、インド洋、南シナ海、東シナ海における盛んな交易活動の実態です。東南アジアは、その交易活動において橋の役割を果たしたわけです。この海域では特に華僑の人、あるいはインド人商人という人たちが、その担い手として活躍しました。そういう意味で、またオランダ東インド会社をはじめとするヨーロッパ人も、アジアの内部での交易に一定の役割を果たしております。

今日のアジアにおける経済的相互依存関係の淵源は、ある意味で、この時期にまでさかのぼることができるのではないかと思っております。したがって、東アジア共同体にかかわる将来を考える場合、このような長期的な視野で考えていただくことも必要なのではないかと思います。

第６セッションで論じられた、東アジアおよび東南アジアという地域にかかわる研究教育機関の構想という点については、大いに支持したいと思います。望むらくは、歴史研究を中心とする人文社会科学が基盤になってほしいと思うのは、私自身の専門に引きつけた職業的な意識の表れかもしれませんが。

最後に、これは総合司会をされた長尾さんが、Last but not least とおっしゃいましたが、今回の国際シンポジウムによって、私個人は大いに刺激を受けました。その意味で、ご報告をいただいたすべての先生がたに感謝したいと思います。また、わが経済学研究科が、このような大規模な会議の開催を、ライテラー公使をはじめとするＥＵ駐日欧州委員会代表部とともに開催できたことを名誉とするとともに、深甚なる感謝の意を評する次第です。

最後の最後になりましたが、このシンポを支えてくださった通訳の方々に感謝したいと思います。さらにスタッフ、特にわが大学の大学院生の方々にも、お礼の言葉を申したいと思います。

これをもって終わりの言葉にさせていただきます。